

旧約聖書 ミカ書 6章1－8節

使徒書 コリントの信徒への手紙一 1章18－31節

福音書 マタイによる福音書 5章1－12節

本日の旧約日課は、ミカ書です。ミカ書は、十二小預言書に入り、教会の礼拝では、クリスマスの時に5章1節がマタイ福音書2章6節で引用されていることで有名です。ミカ書自体は、アモス書、ホセア書と同じく社会正義について語る預言書です。ことに著者の預言者ミカは、紀元前8世紀ごろにモレシエト（おそらくユダ王国南部の小さな村、モレシエト・ガトとも呼ばれた村）という小さい村の出身です。1章1節に「**ユダの王、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの治世に、モレシエト人ミカに臨んだ主の言葉。それは、サマリアとエルサレムについて見た幻である**」とある通り、ユダ王国の王たちを挙げ、さらにサマリアとエルサレムと、北イスラエル王国と南ユダ王国の両方に対して預言しています。無名の村出身の預言者が、南北イスラエル全体の不正を強く批判する姿には、洗礼者ヨハネやイエス様の起源、あるいは預言活動の本質を暗示させるものがあります。ことにミカ書にある平和に関する記述（4章3節）は、イザヤ書2章4節と並び、主なる神様の望まれる平和が、どのようなものであるかを示す箇所として有名です。

そのように短くても内容が濃いミカ書ですが、本日の箇所は、小見出しに「主の告発」とある通り、主なる神様がイスラエルを強く批判する預言の箇所です。

「主が語ることをよく聞け」と始まりますが、「聞け」という言葉は、すでに何度も語られていました（1：2、3：1、3：9）。2節に「**主はご自分の民を告発しイスラエルと論争される**」とあり、イスラエル全体に向けられています。

その内容は「わが民よ、私はあなたに何をしたというのか。何をもって、あなたを疲れさせたのか。私に答えよ」で始まり、4節、5節は、出エジプトの出来事を振り返りつつ、「**主の正義の御業を考えてみよ**」とイスラエルに対して、主なる神様の視点で、何が正義であるかを問います。「考えよ」は、単に「知れ、知りなさい」と訳してもよいのですが、それは単に歴史を振り返れということではなく、また、何が事実であるか識別するような客観的視点を持つということでもなく、出エジプトの出来事から主なる神様が、イスラエルとどうか関わって来たかを、今の自分に関わる事柄として思い起こせということです。

それゆえに6節が続きます。そこでは「**何をもって主にまみえ、いと高き神にぬかずくべきか。焼き尽くすいけにえか、一歳の子牛か**」とあります。「主にまみえ」とありますが、きれいな訳語のゆえにかえって分かりにくいかもしれません。原文は単に「行く（来る）」という言葉があり、口語訳では「主のみ前に行き」、新共同訳では「主の御前に出で」とありました。主なる神様の前に出る、その単純な表現は、どのような行動を持って主なる神様に向き合うのかということです。それは犠牲ではないのです。続く、7節は「**果たして、主は幾千の雄**

羊、幾万のしたたる油を喜ばれるだろうか。私は自らの背きの罪のために長子を、自らの罪のために、胎から生まれた子を献げるべきか」は、イスラエルの神殿祭儀を思い起こさせるような記述から、イスラエルとは異なる異教の犠牲の様子まで描き、それらを主なる神様が喜ばれないことを示します。

この箇所結論は8節です。そこには「人よ、何が善であるのか。そして、主は何をあなたに求めておられるか。それは公正を行い、慈しみを愛し、へりくだって、あなたの神と共に歩むことである」とあります。たった一節ですが、『聖書（旧約）』の信仰の本質とも呼べるような深い言葉が並んでいます。

「善」という言葉は、一般的に「よい」を意味する言葉ですが、漢字の「善」が示すような深い意味に考えて構いません。創世記で、主なる神様がご自身の造られたものを「よし」とされた「よい」という言葉でもあります。そして哲学的に考えれば、しかし、何が「善」か、それは人類にとって究極の問いといえます。ミカ書はここでそれを「主が求められること」と結びつけます。これはまさに『聖書』が何を善としているかを示す判断基準です。その答えにはいくつかの言葉が用いられていますが、ひとつは「公正」を行うことです。「公正」という言葉は、「正義、裁き」などにも訳されますが、別の「正義」という意言と合わせて、「正義と公正」と、主なる神様が人間に判断基準として求める大切な事柄です。次に「慈しみ」です。そしてその言葉と組み合わされている言葉が、動詞ですが「愛する（愛）」という言葉です。「慈しみと愛」、この二つの言葉は、両方とも愛と訳してよい言葉で、これらも主なる神様が人間に行動面で求める大切な事柄です。さらにこのミカ書が示す大切なことは、それらを踏まえたうえで「へりくだって」、すなわち自ら低くして、主なる神とともに歩むことです。この「とも」という言葉は、「インマヌエル」（神われらとともにいます）という表現の一部でもあります。

「正義と公正」、「慈しみと愛」、そして「主なる神様とともにいること」、これらが大切な事柄であることは説明の必要がないほどであると思います。そして、より大切なことは、それらすべてを満たすことです。もちろん、人間には様々な限界があり、また思考、方向性、習慣、常識、様々な要因があり、どうしてもそれらの中でどれか一つを偏重してしまうという傾向は否めません。たとえば、それが「主なる神様とともにいたい」という素朴な希望であっても、それは主なる神様の「よい」こととは異なるのです。預言者ミカが直面した不正とは、おそらく、完全なる悪の働きではなく、主なる神様の求める正義か慈しみか、あるいは主なる神様とともにあること、それらどれか一つを強調して、悪なる部分を覆い隠してしまっていた不正かもしれません。

ミカ書が示す課題は、困難かもしれません。ただし、主なる神様は何も道標なしにそれを求めているわけではありません。旧約においては、ミカ書が示す通りに、預言者の言葉があり、そして律法があります。わたしたち教会にとっては、それらすべてを究極的に完成されたイエス様がおられます。これからもイエス様を道標として、ミカ書が示す事柄を実践していきたいと思います。